

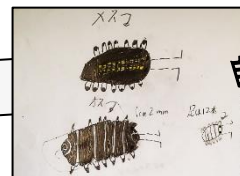
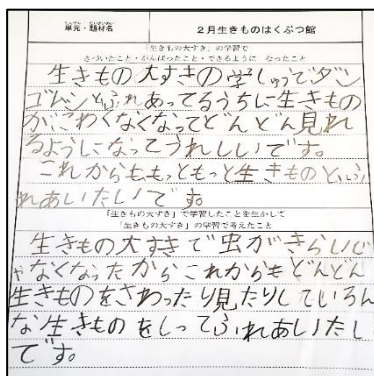
自分をひらき、自信を持って生かし発揮しようとする子どもの育成

小学校 高市 淳史、大塚 翔
研究協力者 鴛原 進 (愛媛大学)

1 主題設定の理由

私たちは、前期研究の「〈自己効力感〉が高まる学びを探る」において、〈自己効力感〉が高まっている姿に、「深い学び」を実現した子どもの姿が表れていることを実感している。では、「深い学び」を実現した子どもの姿とはどのような姿であろうか。生き物が苦手だったA児が、「深い学び」を経て、生き物への親しみを持って、自分の世界を広げたり深めたりして生活を豊かにしていく姿から考えてみよう。

A児は、生き物を育てた経験がなく、生き物にかかわることは苦手。そんなA児が生き物探検をした際、ダンゴムシを捕まえてきた。「この生き物なら大丈夫」と始まった、ダンゴムシとの生活。A児は、毎日、シュッシュと水をやり、枯れ葉を置く。ダンゴムシとの距離が少しずつ縮んでいく。そんなある日、A児の虫かごに、友達が集まっていた。そこには、生まれたばかりのダンゴムシの赤ちゃんが。体長は1、2mm程度の大きさだが、A児は見逃さなかった。そっとのぞき込むそのまなざしは、生き物への温かさとおもしろさを感じる。飼育活動を通して、ダンゴムシの変化がA児の生き物への親しみを呼び起こしたのだ。その後も、観察したり図鑑で調べたりするなど、A児のかかわりは続いていく。A児は、「これからも、もっと生き物と触れ合いたい」という新たな思いを持ちながら、いろいろな生き物に関心を持ってかかわっていく姿が見られた。



生かし発揮しようとする姿

自分をひらき

自信を持って

私たちがぎんなん学習で目指す「深い学び」を実現した子どもの姿とは、A児のような姿であると考え。A児は、「生き物は苦手だけど自分が捕まえたダンゴムシだから育ててみたい」という思いや願いを持ち、ダンゴムシに自分の心と体を開きかかわる中で、気付きの質を高めていた。また、思いや願いの実現に向かう中で、自分のよさや可能性を切り拓き、自分のダンゴムシから生き物への世界を広げたり深めたりした。自分をひらくことを通して、A児は、生き物へのかかわりに自信を持って、今まで育まれた資質・能力を生かし発揮していた。

このように「深い学び」を実現したA児の姿から、私たちは、ぎんなん学習における目指す姿を「自分をひらき、自信を持って生かし発揮しようとする子ども」とした。「自分をひらき（「開く」と「拓く）」とは、身近な人々、社会及び自然（本校においては「学習材」と捉えている。）や他者に対して自らの心身を開き、気付きの質を高めること、それらとかかわりながら自分のよさや可能性を切り拓き、よりよい自分を創り出すことである。「自信を持って」とは、自分をひらくことによって、自分への自信を持ち、「まだできる」「もっとやれる」と自らの成長に対する期待感を抱くことである。そのような自分への自信や期待感を持った子どもは、もの・こと、人とのよりよい関係を能動的・主体的に築きながら、今まで育まれた資質・能力を生かし発揮することができるだろう。

以上のことを踏まえ、研究主題「自分をひらき、自信を持って生かし発揮しようとする子どもの育成」を設定した。

2 ぎんなん学習における「子どもと創る『深い学び』」

(1) 子どもと共に学びをつなぐぎんなん学習の授業づくり

ア んん学習における「深い学び」とは

ぎんなん学習における「深い学び」とは、「自分をひらき、自信を持って生かし発揮しようとする子ども」の姿が表れる、思いや願いを実現する学習過程そのものである。子どもは学習材との魅力的な「出会い」により自分の思いや願いを持ち、その実現に向かって夢中になって対象とかかわり「追究」する。そして、環境からの働き掛けや他者との学び合いにより、体験活動と表現活動との豊かなつながりが気付きの質を高め、対象の世界を広げ深める。そのような子どもの思いや願いが実現されたときの成就感や達成感は大いなるものである。さらに、学習の「振り返り」の中で、自分に自信を持つことができた子どもは、新たな思いや願いを持って、今まで育まれた資質・能力を生かし発揮し、自分の生活を豊かにしていくことであろう。

こうした学習過程を、「深い学び」に導く鍵となるのが、「身近な生活にかかわる見方・考え方」である。「身近な生活にかかわる見方」とは、学習材を自分とのかかわりで捉えることである。また、「身近な生活にかかわる考え方」とは、多様な学習活動を通して、自分自身や自分の生活について考えることである。これらの幼児期から育まれた見方・考え方を生かすことによって、思いや願いを実現する学習過程は、子どもを「深い学び」に誘い、「自分をひらき、自信を持って生かし発揮しようとする姿」へと導くであろう。

イ 子どもと共に学びをつなぐぎんなん学習の授業

ぎんなん学習においての子どもの学び方は、自分とのかかわりの中で自分自身や自分の生活を考え、他者と対話しながら自分の対象の世界を広げ深め、自分の生活を豊かにしていくことである。つまり、「自分」なしに語ることができないのが、ぎんなん学習である。したがって、本学習における「子どもと共に」とは、子どもが「自分」のこととして対象にかかわっていくことができるような、教師の働き掛けが肝要である。その教師の働き掛けとは、子どもの思いや願い、思考や内面を見取り、心の動きに寄り添い、学習材・他者・自分自身とつなぐことである。そのためには、子どもが何を思い、考えているのかを日々の子どもの姿から見取ることは欠かすことはできない。子どもの思いや考えを教師が共感理解することで、子どもの心の動きに寄り添いながら、学習材・他者・自分自身とつなぐことができる。では、教師がそれら三つの対象と子どもをつなぐには、どのように働き掛ければよいのだろうか。私たちは、三つの対象をつなぐぎんなん学習の授業の在り方を次のように考えた(図1)。

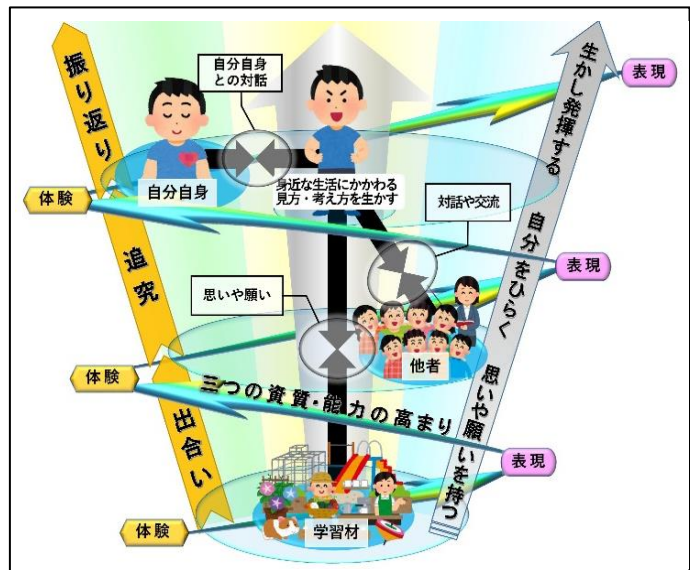


図1 んん学習における「子どもと創る『深い学び』」

(ア) 学習材とつなぐ

子どもを学習材とつなぐとは、子どもの思いや願いを育む生活づくり・学習づくりを大切にすることである。ぎんなん学習における学習材とは、子どもの取り巻く身近な人、ものやことすべてである。だからこそ、日頃から、子どもがどんなことに興味を持っているのか、今、目の前の子どもたちにとってどんな学びが必要なのかを見取り、子どもと教師の思いや願いが重なるところに、学習材とつなぐ意義があると考えます。教師は子どもの思いや育ちを見取り、生活の中から思いや願いが育まれるよう働き掛けていく。そして、子どもの「やりたい」という思いを単元にし、時空間を十分に保障しながら能動的・主体的に取り組むことができるようにする。

(イ) 他者とつなぐ

子どもを他者とつなぐとは、他者との対話や交流を促し、子どもの対象の世界を広げ深めること

を大切にすることである。そのためには、ありのままの自分を出し表せる支持的な風土がある集団づくりと、他者に伝えたい、つながりたいという充実した体験活動が保障されていることが前提にある。これらの上に、思いや願いの実現に向けて、子どもは、共に創り出す小集団の中で活動する。また、互いに感じたことや気付いたことを伝え合い交流する活動や、振り返り表現する活動を通して気付きを共有し、気付きの質を高めるとともに、子どもの対象の世界を広げ深めることができるようにする。

(ウ) 自分自身とつなぐ

子どもを自分自身とつなぐとは、子どもがいかに関わりながら学んでいるかということ大切にすることである。学びはどこまでも自分自身の中で成立する。自分の考えを持ち、自分自身を見詰める。また、他者とかがかわることによって、自分の考えを吟味し、確信したり再構築したりする。このような自分自身の中で行われている対話を、教師が子どもに働き掛けることで、心の内に秘めた思いや考えを出し表せることができるようにする。

これらのことから、ぎんなん学習では、子どもと共に学びをつなぐ授業づくりを通して、「子どもと創る『深い学び』」の実現を目指す。

(2) 子どもの学びをつなぐ指導の手立て

ア 「出会い」の場面において学びをつなぐ手立て（主に学習材と）

「出会い」の場面においては、子どもの心が動くような学習材との「出会い」を日常生活に設定し、生活の中から「もっとやってみたい」「自分で見付けたい」などの思いや願いを育てることを大切にすること。そうすることで、充実感が満たされた子どもは、思いや願いをもち、主体的に対象にかかわるだろう。

イ 「追究」の場面において学びをつなぐ手立て（主に他者と）

「追究」の場面では、子どもが思いや願いの実現に向かう中で、子どもが夢中になれる多様な学習活動を工夫することや、ありのままの自分を出し表したり、他者と協力したりする関係づくりを支えることを大切にすること。そうすることで、子どもは、思いや願いの実現に向けて、他者と共に追究する楽しさや喜びを感じながら気付きの質を高め、対象への世界を広げ深めるだろう。

ウ 「振り返り」の場面において学びをつなぐ手立て（主に自分自身と）

「振り返り」の場面では、思いや願いの実現に向けて対象にかかわり続けた自分自身に気付くことができるように、活動や体験したことを絵や言葉などによって振り返り、表現する機会を大切にすること。そうすることで、子どもは育まれた資質・能力を自覚し、自分の成長を感じると考える。さらに、自分の成長を自覚した子どもは、今まで学んだことを「生かしたい」「発揮したい」という新たな思いや願いをもち、活動を創造したり、自分の生活を豊かにしたりしていくだろう。

(3) 「子どもと創る『深い学び』」における評価

ア 評価の視点

(7) 指導者評価

ぎんなん学習における指導者評価の視点とは、「出会い」「追究」「振り返り」の場面において、三つの資質・能力を評価していくことである。もちろん、三つの資質・能力のつながりは連動しており、子どもの姿としては一体的に表れるものである。そのため、それぞれの場面において、一つ一つの資質・能力を顕著に評価することが難しい場合もある。そこで、子どもの考えや行動がどのように変容したのか、今ここにいる子どもはこれからどのようにしていきたいのかなど、子どもの資質・能力の育ちを長い目で見取ることが大事になってくる。また、子どもの様態や発言だけでなく、子どもの働き掛け方や成果物など、多様なものから子どもの育ちを広い目で見取ることを大切にすること。このような長い目と広い目を持って、単元全体で評価を行う。

(1) 自己評価

ぎんなん学習における自己評価の視点とは、子どもが「どのようなことを思ったり、気付いたり

したか」「どのように思いや願いを実現したか」という今までの学びや学び方を振り返ることと、「これからどのようなことをしたいか」という先を見据えた見通しを持つことである。子どもが書いた自己評価をこれらの視点を基に見取することで、教師が「主体的に学習に取り組む態度」を主として三つの資質・能力の育ちを評価する。

イ めんなん学習における資質・能力の評価の観点

【知識・技能（知識及び技能の基礎）】

具体的な活動や体験を通して生み出される、学習材や他者、自分自身についての気付きを大切にす。その気付きが他者の気付きと関連付いたり、既存の経験などと組み合わせたりして、気付きの質がどのように高まっているかを評価する。また、具体的な活動や体験において、どのような生活上必要な習慣や技能を身に付けているかも見取る。

【思考・判断・表現（思考力、判断力、表現力等の基礎）】

子どもが学習材を自分とのかかわりで捉え、自分自身や自分の生活について考えて、どのように活動を広げたり深めたりしているかを評価する。特に、「見付ける」「比べる」「たとえる」など分析的に考えたり、「試す」「見通す」「工夫する」など創造的に考えたりしていることをどのように表現しているかを見取る。

【主体的に学習に取り組む態度（学びに向かう力、人間性等）】

子どもが学習材や他者、自分自身や自分の生活にどれほどの関心を持って、思いや願いの実現に粘り強く取り組んでいるかや、状況に応じた働き掛けを進んで行おうとしているかを評価する。また、そうした取組を通して自信を持って生活を豊かにしたり、対象に継続的に働き掛けたりするような態度が身に付いているかを見取る。

ウ 評価の具手的な手立て

授業構想時に「出会い」「追究」「振り返り」の場面で「子どもの見取りの視点」を設定する。子どもの見取りの視点を通して、振り返りカードや授業中の様態、学習カード、成果物、写真などから三つの資質・能力を評価する。特に、振り返りカードに重きを置き、子どもの振り返りや教師の称揚、価値付けなどが見えるように紙面を工夫することで、学びの軌跡を教師や子ども自身が見取ることができるようにする。

(4) 教科等横断的な単元の構想

低学年期の子どもの学び方は、幼児期に見られるような身近な環境や他者を一体的に捉える総合的なものであり、各教科等のねらいを含む学びが展開されている。そこで、めんなん学習において教科等横断的な単元を構想するに当たっては、各教科等との合科的・関連的な指導を重視し、各教科等をつなぐ核としての役割を果たすことができるようにする。

また、幼児期の学びを、幼稚園教育要領で示されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿（以下、『育ってほしい姿』）」と捉え、これらがめんなん学習においてどのようなつながりを持つかを整理した。さらに、めんなん学習における「身近な生活にかかわる見方・考え方」を生かすためにも、幼児期の学びを意識して生かし発揮していくような単元を構想する（図2）。

めんなん学習は、思いや願いを実現する過程の中で、他教科等で学んだことを生かしたり、他教科等に学びを求めたりする関連的な指導を重視する単元構想が適している。また、幼児期に育まれた資質・能力が見方・考え方として生かされ、3年生以上の学習にも、つながりを明確に持つことができる。

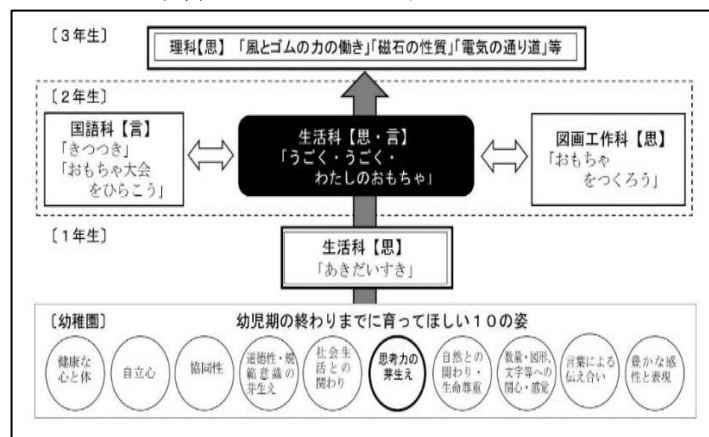


図2 めんなん学習における教科等横断的な単元構想

(大塚 翔)